

# 平成 29 年度 第 2 回磐田市総合教育会議 会議録

日 時 平成 30 年 1 月 19 日 (金) 午後 1 時 30 分 ~ 午後 3 時 00 分

会 場 磐田市役所 西庁舎 3 階 特別会議室

出席者 市長、教育長、杉本憲司委員、青島美子委員、秋元富敏委員、鈴木好美委員  
(出席者 6 名)

事務局 企画部長、教育部長、秘書政策課長、教育総務課長  
秘書政策課政策・行革推進グループ長、担当  
教育総務課総務グループ長、担当

傍聴者 0 名

## [ 会議次第 ]

1 開 会

2 市長あいさつ

3 協議事項

(1) 平成 29 年度の振り返りとこれからの磐田の教育について

(2) その他

4 閉 会

## [ 協議の主な内容 ]

### (1)平成 29 年度の振り返りとこれからの磐田の教育について

市長

本日のテーマは「平成 29 年度の振り返りとこれからの磐田の教育について」となっております。それぞれ、平成 29 年度の思いの丈、感じたこと、もう少し次年度以降こうすればいいなど、どんなことでも結構ですのでお願いします。

委員

教育委員にさせていただいて半年になる。最初から保護者という立場でその時自分が感じたこと、思ったことを口に出させていただいている。

先日、今年度新たに教育委員になった方を対象とした新任研修会に参加してきた。そのなかで「新教育委員会制度」というものも勉強してきましたので、これからまた勉強させていただきたいと思う。

自分も子育て中で、今までは自分の子どものことだけとっていたが、これからの子どもたちがどうやって生き抜いていけるか、どうしたら生きやすい世の中になるのかを、自分なりに視野を広げていかなければならないと思った。

委員

11 月に先進校視察で訪れた学校では、素直で真面目に一生懸命頑張っている子が多く、東京の子ども達に対する自分のイメージが覆された。また、校長先生や教員の熱意、何よりもそれを支える保護者のコーディネーターの方々が、学校のことを本当によく理解しており、学校に足りないこと、協力できることを率先して行っている姿にとっても感動した。磐田も同じ様にやるのではなく、磐田風アレンジし、ますますよい教育環境が作れたらと思う。

最近、多くの会社では、ものづくりとなると「標準化」ということで、作業をマニュアル化し、「このとおりに作る」「間違っことは一切やってはいけない」ということを徹底している。そのため、みんなの考える力が間違いなく落ちてきていると思う。教育も、一生懸命やればやる程、ある程度のところまで行くと振れ幅が小さくなって揃った子にはなるが、その分個性というものが失われてきているのではないかと思う。

例えば、日本の大学生は留学する人が少ない。良い会社に入るために良い大学に行くという図式が成り立っていて、海外の大学生のように、海外に飛び出して行ったり、起業したりして、なんとか自分の力で生き抜こうとする子が少なくなっているということを目にする。これが一番の課題ではないかと思う。良い会社に入って、言われた通りのことをやっていけばそれなりの暮らしはできるが、そういう人ばかりでは将来の国は成り立たなくなると思うし、何かを改革していく、新しいものを創造する力や人を育てていくことが大事ではないかと思う。

また、スポーツ少年団での様子では、ご飯を炊いたり、洗濯したりといった経験の少ない子が多いと感じている。ましてや手でお米を洗ったり、手で

洗濯物を洗ったことがある子はいない。昔はもっと家で手伝いをしていたように思し、そういった経験がものの本質を知るきっかけとなっていたように思う。子ども達にそういった経験をさせたいという思いで、子ども達を春野の山の村へ連れて行き、自炊させたり、洗濯させたりということを企画している。子どもたちは炊事や洗濯を喜んでやっていて、手伝いをするのが嫌なわけではないのだと感じる。家で親がそういう方向に向けてやれば手伝いもするのだと思う。

自分ができることはそのような場を設けることくらいだが、これから微力ながらもそういう経験をしてもらおう子を増やしたいと思う。

委員

去年の5月に再任していただきこの場に立たせていただいている。いつも感じているが、入学式や卒業式という子ども達の旅立ちに立ち会わせていただけること、子ども達の凛々しく、たくましく、自信を持っている姿が見られることをとても幸せに感じている。それと共に、いただいた役職の重みを味わいながら、これからも精一杯努めていきたいと思う。

11月に出向いた東京再開発地域の小中学校の視察では、自宅から学校へ向かうまでの間に殆どがコミュニティとの触れ合いが無いということに驚いた。こういった子ども達は社会的なコミュニティをどこで学ぶのか疑問に思った。また特に感じたのが、教育の本質であった。都内某小学校では、これまで先進的に取り組んできたことや積み上げられた実績が、各カリキュラムやイベントを通して、生徒たちが体験できるようになっており、「節節」を体験させるとこの取組みがとても大切で素晴らしいことだと感じた。「節」を体験させることは生きる力を体験することだと思っている

これからAIが進むと、人間の持つ感性やインスピレーションが求められる時代がくるが、そのためには体験や経験をさせる、そうした自然から学ぶ力を子ども達には持ってもらいたい。

委員

豊田中学校が「キャリア教育優良学校」ということで文部科学大臣賞を受けたことが新聞に出ていた。生徒が事業所に出向く職業体験を実施し、それぞれが主体的に自分の将来像を描くことを目的としている。子ども達が将来、「どういう大人になろうか」「どんな仕事をしようか」ということを小さい頃に体験を通して思い描くことが大切なのではないかと思う。これは幼稚園に通う孫を見ていても実感することで、お正月に大人がやっていた百人一首を横で見ていた孫は何度か見ただけで覚えてしまい、読み手も百首読めてしまう程であった。体験とはこういうことで、子どもは小さいうちにやればやる程身に付くものだというを実感した。そういったことから、子ども達には小さい頃からいろんな体験をさせてあげることが一番大切なのではないかと思う。

磐田の子ども達には、いろんな体験を通して「どんな大人になっていきたいか」「どんな仕事を持って生きていくか」を身に付けさせ、幅の広い子ども

になって行ってほしい。

教育長

学校教育の主たる目標は「人間教育」である。「体験」「考える力」「個性」は教育の中でとても大切なもの。人と人との繋がりや関わりから人間は成長する。学府一体校ではそういったことを大切にしていかなければならないと思う。

市長

時代によって若者のタイプは変わるが、一番子ども達が影響を受けるのは、親や家族、教師だが、先生方の年代による傾向はあるか？

教育長

最近の先生は比較的ドライな方や心の交流ができない教員もいると言われている。子どもと心の交流ができなくなると、とても大変である。

また管理職であっても、教師の心がわからない教員もいることなども、とても問題であると思う。

市長

最近の若手社員の傾向はあるか？

委員

おとなしい子が多いと思う。就職活動の面接では、学生たちは同じようなリクルートスーツ、鞆、髪型で、みんな同じに見えてしまう。これはどうかと思う。昔であれば自分を売り込むために、少し違うように見せたりしたが、今は人と違うことはしないほうが良いと思っている。そういう方は会社に入っても、怒られたくないから余分なことはしないという考え方を持っているように思う。

市長

経験が大切とはわかっていながらも、現役世代の方からすれば、そうは言っても目の前のことが優先になりますよね。

委員

学校にいる間は勉強ができたほうが良いとは思っている。勉強はできるけれど経験の少ない子もいる。一方で経験豊富で勉強以外の手先を使うことなどはとても上手な子もいる。なりたい職業に就くためには勉強も経験も必要となる。だから学校教育は難しいなと感じる。

市長

子ども達のために良かれと思っていることを学校現場だけでなく保護者、地域でどうしていったらいいのか、「見える化」をして組み立てをしていかなければならない。学校でできること、保護者、地域が啓発できることを具体化していかなければならないと思う。

委員

いわゆる「いい子」は決してよくない。昔でいう「スノッポ(※)」な子が現代いなくなっている。ひとつの規制の枠に囚われなくて天真爛漫に生きているような子が少なくなっている。

また、子ども同士の遊びが減っている。異世代との交流より、同世代のな

かでのふれあいがあるほうがよいと思う。そういうことを学校教育に求めるのではなく、地域を巻き込んで、地域が子ども達を育てるという位の気持ちがあったほうがよいのではないかと思う。地域や交流センターを活用しながら自然体験をさせて、人間の感性とインスピレーションを育てる経験をさせたほうがよいと思う。

委員

今の地域の方は、自分が傷つきたくない、嫌な気持ちになりたくないと思うのか、直接子どもを叱ることをしなくなっているように思う。近所で喧嘩やいたずらを見た時、その場では叱らず学校に連絡しているようだ。そうすると、子ども達の間ではすでに解決していることでも、先生が調査をしなければならなくなり、余分な手間が発生してしまう。昔だったらその場で解決していたことが、学校にまで持ち込まれて解決するかたちになってしまっている。こういったことが地域の教育力がないと言われ始めた所以かなと思った。

市長

来年度、こういったことを意識しながらやってみたいと思うことがあればお聞きしたい。

委員

地元のことをもっと知るために、いろんなことに積極的に参加していきたいと思う。

委員

教育大綱を作って3年になるが、我々自身が取り組まなければならない内容だと思っている。市民のコミュニティ作りの原点として、地域文化の向上のために、教育大綱をもっともっと前に出していかなければならないと思う。市民力を高めることによって、その高まった土壌のなかで子ども達がすこやかに成長していくことができるのだと思う。

委員

スポーツが盛んで部活も重要視されているのはとてもいいことだが、文化的な部活も、もっと作ってほしい。スポーツの苦手な子もいるなかで、それぞれの特技・個性を生かしてやるためには、文化的なことを幅広く体験できる場も作ってあげてほしい。それが自分の好きなものを選択できることに繋がるのではないかと思う。

市長

いろんな機会に出会い、選択できるようにしてあげたい。学校でやりたいことを手挙げ方式でやってしまうと、大事なことを全校でやる事が出来なくなる。学校現場で、できることできないことを仕分けていくことが大切だと思う。いろんな教養を身に付けることは必要だと思う。

委員

教育委員になって「地域と教育」「文化と教育」について考えるようになった。磐田を誇りに思っ、いずれ磐田に戻ってきてくれるような子ども達を

育てていくこと、磐田市で小さい頃を過ごせて楽しかったと思えるような教育をしていくことが大切だと感じた。文化や史跡等も含め、磐田のいいところをもっと教えていかなければいけないと思った。磐田に「国府」があったことを子ども達にもっともっと誇りに思ってもらえるような教育をしていく、そのヒントを来年度は探していきたい。

市長

郷土で偉人が出ると、例えば山口県の萩市では今でも子ども達が「松陰先生」と呼んだり、大河ドラマで西郷どんをやっているが、鹿児島では今も「郷中教育」を意識しながら教育をしていると聞く。磐田も小中学校の教育の中で、数少ないがこれだけは意識して唱和する、教えていく、伝えていくというものを組み込んで教育をすることは大事なこともかもしれない。

教育長

来年度のキーワードは「質的転換」だと思っている。人を多くすること、モノがあること、時間があれば次の段階があるのかということ、考えていかなければならないと思う。

人数を多くすればよい教育が展開できるのかということをもう一度煎じ詰める必要があると思う。子どもへの指導に時間がかかるのは当たり前で、時間があればできる仕事があるというわけではないということをしつかりと捉えていかなければならない。

富士市で小学4年生の子が踏切に入り亡くなる事件があった。こういった時に、もしかしたら命が守れたのではないか、何がどういう状況にあったのかを、大人が今一度しつかり見つめないといけない。必ず隙間があるはずだ。

今の磐田市の教育はとても安定している。すでに行っているが、道徳の教科化に伴って、コーディネーターと事業者が一緒になって、教育のみちしるべについての具体的な模擬授業をしている。教育大綱に書かれていることを具体的に行っているところで、それをどうやって広めていくことができるかがこれから重要になってくる。

これから質的転換を求めていくが、子どもに接する時、いかに質的に高く接することができるか、また保護者に対しても、質的高い対応ができるか、ということが大切になってくると思う。

市長

一体校については準備を進めているが、委員さんに伝えたいことは、今、全てが人とのなりあいで社会が構成されているので、教育委員会の分野だけの教育ではなくなってきた。ある意味、人材の育成である。一体校の狙いは、学校を活かして地域を巻き込んで一つの核を作るという思いでいる。ながふじ学府一体校の図書室は、従来の小中学校にあった図書室のイメージを覆すものである。最先端の情報が得られ、実用本から幅広く図書を置き、これまでの図書室のイメージと違う部分を取り入れることに挑戦している。

学校の土地利用が可能となり調整区域を宅地分譲すると、新しい方が入ってきてまちが変わってくるはずだ。そういった意味では、一体校はまちづく

りでもある。

公民館を交流センターにした時、大変苦労したが、事を成そうと思うというろんなことが付いてまわる。しかし、やれる時に思い切って一歩二歩前に踏み出ていかなければならないのだと思う。

教育長

最近転職をした息子に自分の反省点を見つけた。息子は自分が指示した内容は聞いていないが、自分が何気なくやっていたことはよく見ていた。車を購入する時にも、息子は私と好みがいっしょで自分と同じ色を選んでいた。教育のひとつの世界で、環境や知らないところでの教育（教え）というのがある。つまり潜在意識が教育をするということだが、最近起こっている教師の不祥事や子供の死亡事故等は我々が気づかないところで全て繋がっているのではないかと思っている。

不登校の数は、3年間で少しずつ減ってきている。不登校をどう扱えばいいか？ということをして小学1年～中学3年の担任に調査活動を行い、活動事項を決めて実際に動いてもらっている。「どうして不登校になってしまうのか？」といった原因も含め、大学教授を交えて不登校対策についても共通理解のもとに行っている。こういった試みの成果が出始めているのだと思う。

子どもの命を大切にすることは大人の責任が大きく絡んでいる。教育だけではなく、家庭、子どもを取り巻く環境、全てが子どもの命に関係しているということをして、自分自身が今一度認識しなければならないと思っている。

※スノッポ…判断基準を自己に持ち、冒険を好んでするような子